［平成１９年度実証された技術］

［技術名］イノシシ等の発生地域の休耕田に和牛を放牧することにより獣害を軽減できる

［要　約］イノシシやシカによる獣害が多発している地域の休耕田に、周囲を電気牧柵で囲い春から秋にかけて和牛（若狭牛）を昼夜連続放牧することにより、獣害を軽減できる。

［キーワード］若狭牛、休耕田、放牧、獣害防止、電気牧柵

［担　当］嶺南牧場・繁殖課

［連絡先］電話 0770-62-0583、電子メール reinabok@pref.fukui.lg.jp

［背景・ねらい］

嶺南地域はイノシシ、シカ、猿の獣害多発地域であり、これまで農作物への被害回避のために防護柵や捕獲檻等の対策がとられている。一方、農業者の高齢化等による休耕田や耕作放棄地の増加によりイノシシやシカの生息が広がり、さらに獣害が拡大され営農意欲は低下している。牛の放牧は飼料の有効利用や家畜管理の省力化のほか、景観形成、獣害軽減の効果があるとされ注目されている。そこで、当牧場では、休耕田を活用して和牛を放牧し、その飼養効果と併せて獣害の防止効果について現地にて検討する。

［技術の内容・特徴］

１．放牧地として山際の休耕田（約１ha）を用い、外周を電気牧柵（支柱間隔２m、３段張り、ソーラー充電器使用）で囲い、簡易な日除けと水槽タンクと飲水器等を設置する（図１）。

２．放牧牛は和牛（妊娠牛）２、３頭を用い、５月から 10 月まで昼夜連続放牧とし、休耕田の野草のみで飼養し補助飼料は給与しない。

３．休耕田の植生は表１のとおりで、嗜好性の良い草種はスズメノカタビラ、スズメノテッポウ、シバ類、ササ、ススキである。

４．放牧期間中に牛の体重が増加しており、血液生化学検査値にも異常は認められない（表２、３）。

５．放牧による獣害への影響は、農作物への被害が減少したとする割合が 55%あり、放牧することでイノシシ、シカに対して周辺農地への侵入防止効果がある（図２）。

６．若狭牛の放牧により集落農業者や見学者に対して、若狭牛のＰＲと牛への理解が促進される。

［技術の活用面・留意点］

１．１日最低１回は放牧牛を看視（脱柵の有無、飲水確認等）をする必要がある。

２．休耕地１ha に放牧する器具等の経費が、約 30 万円必要である。

［具体的データ］

図１　放牧地と施設

表１　供試休耕田の主な野草種

植生	イネ科：メヒシバ、スズメノカタビラ等、キク科：ヨモギ、ハハコグサ、ノアザミ タデ科：ヤノネグサ、ミゾソバ等　カヤツリグサ科：カヤツリグサ等
嗜好性の良い野草	メヒシバ、スズメノカタビラ、スズメノテッポウ、ササ、ススキ
嗜好性の悪い野草	ヨモギ、カヤツリグサ、キンエノコロ、ノアザミ

表２　放牧する前および終了時の血液検査成績

	Ht (%)	TP (g/dl)	BUN (mg/dl)	TCHO (mg/dl)
放牧前	30.5	6.6	17.0	81.5
終了時	31.5	7.1	13.5	100.5
正常値	24～46	6.6～7.6	10～20	78～142

表３　放牧牛の放牧前および終了時の体重

	放牧牛	舎内飼養牛
頭数（n）	2	5
放牧前（Kg）	350	417
終了時（Kg）	387	465

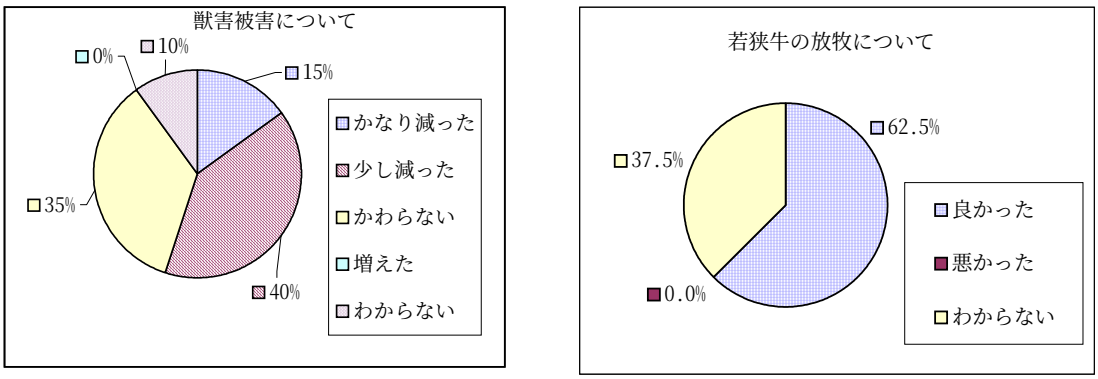

図２　集落アンケート調査結果